

第5分科会：環日本海歴史・自然・環境 II

渤海使の航路と気候変動

卯田 強（新潟大学）

神亀4年9月21日（西暦727.10.10）、高仁義を大使とする24人の渤海国使節団が日本にやってきた。彼らが漂着した地が出羽国の蝦夷の支配地であったため、16人が殺害され、かろうじて高齊徳ら8人のみが、第2代渤海国王大武芸の国書と貂皮などの貢物を携えて入京した。こうして延喜10（919）年までの約200年間に及ぶ日本-渤海間の国交が結ばれることになった。渤海国からの遣日本使は33回（国使として認められなかった779年・929年の使節を加えれば35回）、日本からの遣渤海使は4回（やってきた使節団を送り返すのに9回）、合計39回も渤海と日本との往復があった。平均するとほぼ6年に1回という頻度となる。遣隋使・遣唐使が約300年間に18回であるから、日本と渤海との関係がいかに密であったかがわかる。さらに日本-渤海ルートを通じて、遣唐使が往復したり金品を郵送したりされており、このルートがいかに安定していたかも計り知れる。

渤海からの航海には朝鮮半島北部の日本海沿岸に住む白山靺鞨と呼ばれる人々が操船にあたり、現在のロシア・ポシエト湾あるいは北朝鮮間咸鏡道北青あたりから出航したと考えられている。当初20人前後の使節団であったので小さな舟が使われたが、宝亀4（773）年に来日した一行は40人が1隻に、延暦5（786）年には65人が1隻というように、やや大きな船になった。弘仁6（815）の王孝廉一行の帰国の際には、来日時に船が破損したため、日本政府は遣唐使船に使用したような300tクラスの大型船を与えた。これをきっかけに渤海からはこのように大きな船が就航し、航路が安定

するとともに、使節団も100人を超えるようになる。

渤海から日本への航路は次の3ルートが考えられる。①朝鮮半島東岸沿いに南下するルート、②一旦沿海州沿岸を北上し、北海道へ渡って、東北日本西岸沿いに南下するルート、③日本海をまっすぐ横断するルート。これらいずれが有効であったかを気象学と海洋学から検討してみることにする。

もっとも安全と一般的に考えられるのは①、すなわち、朝鮮半島東岸沿いを南下したのち、本州北岸沿いを東進するのである。時の日本政府もそう考えたらしく、宝亀2（771）年にやってきた使節に対して、今後必ず大宰府に来るように指示している。ところが、宝亀7（776）年の使節は南京南海府吐号浦から出航し対馬を目指したが、途中で遭難し越前国加賀郡に漂着してしまった。もっとも安全と思えるこのルートは、じつはかなり航海術上むずかしいルートである。

来日する使節の多くは秋から冬にかけてであった。現在北朝鮮のデータが手に入らないので、ウラジオストックのものを参考にすると、この時期北～北西よりの10～15ノット（1ノット=0.515 m/秒=1.85km/時）程度の季節風が吹く。さらに鬱陵島では北西の風が卓越する。すなわち、南京南海府から朝鮮半島沿いを南下しても、この季節風によりどんどん東方へ流されていくことになる。本州沿岸域では基本的には北西からの季節

風が卓越するが、南よりの風もかなりの割合で吹いている。運悪くこれに遭遇すると、せっかく本州沿岸に近づいた船が反対に沖に流されてしまう。

さらに朝鮮半島沿いには対馬海流の分流が北北東へ流れている。速度は対馬海峡を出て朝鮮半島へ差し掛かったところで、0.5~1.3ノット、平均1ノット弱である。この海流に抗し、斜めから季節風を受けて進むのは高等な操船技術を必要とされると思われる。同時に、多くの研究者が指摘しているように、朝鮮半島を支配していた新羅との軍事的緊張関係からこのルートは好ましくないといえる。一方、日本海沿岸を北回りするルートであるが、沿岸と一気に半回りするにはそれを後押しする季節風も海流もない。また転々と寄港しながらではあまりにも時間がかかりすぎるし、黒水鞆鞆などとの政治的関係から難しい。結局、日本海をまっすぐ横断するルートを探らざるを得ない。朝鮮半島東岸ルートも季節風に流されて、結果としてこのルートになる。したがって、大宰府へ来いという日本の指示はもともと無理な注文であった。

ところで、日本—渤海の交流が始まった8世紀は世界的に温暖な気候で、ヨーロッパでは「中世温暖期」といわれている。東アジアでは、ポーラーフロント（梅雨前線）が現在よりずっと北まで上がり、太平洋高気圧がかなり早くから日本列島を被っていたらしく、春から初夏にかけて雨が降らないという旱魃の記事が『続日本紀』に多く見られる。ポーラーフロントの北方変移によって東南アジア・モンスーンの影響が大陸内部まで及び、トルコ系民族がオルドスやモンゴル高原で穀物栽培を行っている。冬季も温暖だったらしく、『万葉集』に歌われたサクラを「サクラ温度計」を使って計算すると、天平時代の3月の平均気温は現在より1~1.5℃ほど高かったと推定される。

このような場合、冬季の気象を支配するシベリア高気圧はあまり勢力が強くない、日本海を渡る季節風も強くない、波も穏やかだったと考えられ、渤海からの往来は小型船舶でも危険度は小さかったのだろう。

一方、対馬海流は黒潮の分流なので、対馬海流の駆動は黒潮の強さによるが、とくにこの影響を受けるのは対馬海流のうち、本州沿岸を流れる分流である。温暖期にはこの分流は流速が早いだけでなく著しい蛇行をする。蛇行の仕方は海流自身の速度と日本海に注ぐ河川および海底地形との相互関係で決まり、一定していないが、大まかにいって隠岐の北方を大きく迂回するかまっすぐ山陰沖を東進して若狭湾沖に達し、そこから能登半島を回って佐渡沖から秋田沖へ達する。初期の渤海使節船の到着位置が隠岐から出羽までの間でなかなか一定しなかったのはこの沿岸流の蛇行の影響によると考えられる。

さて、9世紀後半には気候が一時寒冷化したことが尾瀬の花粉分析や屋久島杉の年輪などから知られている。サクラ温度計も9世紀にはやや気温が低下したことを示す。またこの時期は降雨量も多かつたらしく、洪水の記録がたくさん残っており、そのために平安京右京がすっかり荒廃し、後に慶滋保胤は『池亭記』の天元5(982)年の記事で、「西之京は人家漸く稀にして、殆ど幽墟に幾し。人は去るあれども来るなく、屋は壊るるあれど造るなし」と嘆いている。

気候の寒冷化は強い季節風と弱い対馬海流をもたらす。この頃から渤海使節船の往来時期は2月ごろやってきて5・6月ごろ帰り、到着場所も越前から能登付近が多くなり、大型船が就航していたことともあって日渤航路が確定したようである。すなわち、強い季節風を帆いっぱいを受けて、渤海からの使節船はいっきに日本海を横断したの

に違いない。

ちなみに、渤海からもたらされる交易品、とくに毛皮類は人気商品で、天長5(828)年には私的

に購入することを禁止する官符が出されている。毛皮はものめずらしさやファッション性だけではなく、むしろ気候の寒冷化のために需要が高まったのではなかろうか。

COMMENT

川端俊一郎(北海学園大学)

渤海使が奈良時代から平安中期にかけてほぼ二百年の間に35回も日本海を渡って北は出羽から南は長門まであちこちに漂着した。前半の百年をみると、漂着の場所は隠岐から出羽までばらつきが大きい。後半の百年は越前から能登付近にまとまっている。これを気候変動との関連でみると、前半は温暖な世紀で、季節風が弱く危険は少なかったものの、黒潮が強くて、蛇行もしたのであろうから、小型船舶では漂着地が一定しなかった。しかし後半は寒冷な世紀となったので、季節風は強まるが黒潮は弱くなるので、大型船なら航路が確定するだろうと説明しています。

なるほどと思い、一紀一貢(12年に一度、105人)の方針が出た後半の15回の渤海使(823~929年)について漂着地を列記してみると、隠岐・但馬・長門・能登・能登・隠岐・加賀・出雲・加賀・出雲・伯耆・伯耆・若狭・最後が丹後となっており、長門から能登までのばらつきがある。そのうち加賀と能登とで5回あるが、出雲と隠岐も4回、伯耆から若狭にかけても5回あって、必ずしも越前から能登にまとまっているわけではないことがわかります。前半との違いはむしろ出羽への漂着です。前半は6回もあった出羽への漂着が後半にはまったく無いことです。

そこで、気候変動のほかにも、もうひとつ、出航した場所の違いはないのかと考えてみました。渤海建国のころは新羅との対立が厳しかったの

で、当然にも朝鮮半島を海岸伝いに南下することは出来ないわけです。いきおい日本海をまっすぐ進むことになる。渤海使の始まりから13回目までの漂着地の内訳をみると、越前から能登が5回、佐渡と出羽で7回となります。山陰への漂着は一度もありません。6回目は太宰府(もとは南朝の都督府で倭国の都。南朝天子の太宰府が滅ぶと日出処天子は自立して、日本の太宰府と改めた。大和朝廷は「大」宰府と書かせる。)に来ていますが、これは漂着とはいええないものでしょう。前半はおそらく東の京に近い豆満江あたりから夏に來航し、後半には南の京に近い所から、冬に、半島沿いに來航したのではないのでしょうか。

気候の温暖なときには黒潮が強くて、遠くへ漂着するというのは重要な指摘で、かつて縄文時代の温暖期にも、黒潮に乗って南の文物が遠く北方へ運ばれたでしょう。いまお見せしているのは、山東大学百周年式典のとき頂いた記念品ですが、山東竜山文化を代表する「鬻」の複製で、4200年前のものだそうです。これと似た三足土器が縄文晩期の青森県から出土しています。北海道や隠岐の黒曜石の鏃が沿海州から出土するので、満州各地で出土する三足土器が日本海を渡ったことも考えられますが、むしろ山東のものに似ています。あるいは江南からの漂着かもしれません。気候と潮流との関係が気になるところです。黒潮文化圏の証のひとつでしょう。